青年韓愈の長安交遊詩（一）陳羽を送る詩

丸井　憲

はじめに
一、陳羽を送る詩
二、陳羽の生年とその詩風
三、俱文珍を送る詩との比較
おわりに

はじめに

中唐の詩人・韓愈（七六八–八二四）は、徳宗の貞元二年（七八六）、數え年十九歲で江南の宣城（安徽省）を離れ、都・長安に出た。そして六年後の同八年（七九二）に進士科に及第するが、その前後から「落葉一首送陳羽」（五律）、「北極一首贈李觀」（五古）、「重雲一首李觀疾贈之」（五古）、「長安交遊者一首贈孟郊」（五古）など、長安で知り合った友人たちにそれぞれ贈った一連の作品群を生み出している。詩題からも窺われるとおり、これらにはある一貫した制作意圖が籠められていよう。青年韓愈が都に出てまもない頃、その多感な時期に出會った友人たちとの交遊は、韓愈の當時の詩作にいかなる影響を及ぼしたのだろうか。あるいは逆に、韓愈はいかなる意圖をもって、長安での交遊を詩中に描き出そうとしたのだろうか。――筆者はこれら一連の作品群をいま假に「青年韓愈の長安交遊詩」と呼び、本稿では特に「落葉一首 陳羽を送る」詩に焦點を當て、今後の研究の足がかりとすることにした。またその分析にあたっては、作品の體裁（詩體・詩型）や樣式にも注意を拂ってゆくことにする。

本稿で扱う韓愈詩は、原則として錢仲聯氏の『韓昌黎詩繫年集釋』上下冊（上海：上海古籍出版社、一九八四。以下『集釋』と略稱）に據るが、屈守元・常思春兩氏主編『韓愈全集校注』全五冊（成都：四川大學出版社、一九九六。以下『校注』と略稱）

および郝潤華・丁俊麗兩氏の整理になる清・方世舉著『韓昌黎詩集編年箋注』上下冊（北京：中華書局、二〇一二。以下『箋注』と略稱）をも參照し、作品解釋にかかわる異同がある場合には、その旨明記することにする。

一、陳羽を送る詩

長安に出てまもないころの韓愈には、友人が少なかったのであろう、當時の彼に「出門」という短い五言古詩があるが、その冒頭では「長安 百萬の家、門を出づるも 之く所無し。豈に敢へて幽獨を尚ばんや、世と實に參差たり（長安百萬家、出門無所之。豈敢尚幽獨、與世實參差）」と綴られ、その孤獨な心境が語られている。進士科の試驗準備に追われる中で見聞した長安城内の賑々しさは、青年韓愈にとっては無緣の世界であり、この詩の末尾では「且くは此〔古人の書〕の中に於いて息はん、天命、吾を欺かじ（且於此中息、天命不吾欺）」と、前途に不安を感じつつ、讀書に氣を紛らわせている自身の姿を描いている。後年、陽山の令に貶せられていたときの仄韻五排「縣齋にて懷ふ有り」の中で「初めて計吏に隨いて貢せられ、屢〻澤宮に入りて射す。十たび上るの勞を免ると雖も、何ぞ能く一戰にて覇たらん（初隨計吏貢、屢入澤宮射。雖免十上勞、何能一戰覇）」と回想しているとおり、貢子として長安に出て六年もの間、韓愈は實際、三たび試驗に落第し、一回で及第することは適わなかった。

韓愈は貞元六年（七九〇）に一度、宣城へ歸り、亡兄・韓會の息子の韓老成と會っているが（「祭十二郎文」などを參照）、その年の冬にはふたたび長安に戻った。この頃になると、科擧受驗者の中に顔見知りも增え、交遊範圍も擴大していたにちがいない。貞元八年（七九二）の進士科の試驗は、兵部侍郎の陸贄の主宰で行なわれ、「明水賦」と「御濠新柳」の題が課せられた。及第者には韓愈・李觀・歐陽詹・馮宿・王涯らが名を連ね、多士濟々であったことから、「龍虎榜」と稱えられた（『新唐書』卷二〇三「歐陽詹傳」）。そして陳羽という受驗者も、この年「第二人」〔次席〕という見事な成績で及第していた。ちなみに三位は歐陽詹、五位は李觀、六位は馮宿、七位は王涯、そして韓愈は十四位という成績だった（以上、徐松『登科記考』卷十三「貞元八年」の條）。

その陳羽を送る韓愈の詩とは、次のようなものである。

落葉一首送陳羽（落葉一首　陳羽を送る）　韓愈

落葉不更息　落葉　更に息まず
斷蓬無復歸　斷蓬　復た歸る無し
飄颻終自異　飄颻　終に自ら異なり
邂逅暫相依　邂逅　暫く相ひ依る
悄悄深夜語　悄悄として深夜に語れば

悠悠寒月輝　悠悠として寒月輝く
誰云少年別　誰か云はん　少年の別れと
流涙各霑衣　涙を流して　各〻衣を霑す

＊五言律詩。上平聲「微」韻：歸・依・輝・衣

【語釋】○飄颻　漂泊さだめなきこと。疊韻語。○邂逅　たまたま出會うこと。雙聲語。○悄悄　ひそかなさま。○悠悠　はるかなさま。○少年別　若き日の別れ。南朝・梁の沈約「范成安に別る」詩の「生平〔君とはそのかみ〕少年なりし日、手を分かつも前期〔再會を期〕し易かりき。爾と同に衰暮〔この老境〕に及びては、復た〔もはや〕別離の時に非ず（生平少年日、分手易前期、及爾同衰暮、非復別離時）」（『六臣註文選』卷第二十）とあるのを踏まえる。

後年、韓愈が族姪に贈った詩に「我年十八九、壯氣胸中に起こる。書を作して雲闕に獻じ、家を辭して秋蓬を逐ふ（我年十八九、壯氣起胸中。作書獻雲闕、辭家逐秋蓬）」（五古「贈族姪」）とあるとおり、血氣盛んであった青年韓愈も、秋蓬の轉ずるのを逐うようにして宣城をあとにし、長安に出た數年間は、不遇な擧子の一人にすぎなかった。そして陳羽とのこのたびの別れが、あるいは今生の別れになるやもしれぬとの恐れを抱きつつ、韓愈は涙を拭っている。この詩を貞元七年（七九一）の作とする説（『集釋』上冊第七頁）と、同八年（七九二）の作とする説（『校注』第一冊第一頁）とが近來有力であるが、詩中に現れた別離の情の厚さから推して、その繫年を、進士科及第前の「貞元二年から七年までの間」とするのが穩當だろうと、筆者は考えるものである。

二、陳羽の生年とその詩風

『全唐詩』卷三四八「陳羽」の項に附された小傳には「陳羽、江東の人。貞元の進士の第に登り、樂宮尉佐を歷官す。詩一卷（陳羽、江東人。登貞元進士第。歷官樂宮尉佐。詩一卷）」とあるのみであるが、陳貽焮氏主編『增訂注釋全唐詩』卷三三六「陳羽」の項（黨銀平氏執筆）では「陳羽、江東の人。貞元八年に韓愈・王涯等と同に進士に第し、時に龍虎榜と稱せらる。後に東宮尉佐に官たり。韓愈・戴叔倫等と交遊・唱和し、集一卷有り。事は『唐詩紀事』卷三五、『唐才子傳』卷五に見ゆ（陳羽、江東人。貞元八年與韓愈王涯等同第進士、時稱龍虎榜。後官東宮尉佐。與韓愈戴叔倫等交遊唱和。有集一卷。事見『唐詩紀事』卷三五、『唐才子傳』卷五）」と紹介され、韓愈や戴叔倫らと交遊し、詩を唱和し合ったことが記されている。陳羽と戴叔倫との唱和は確かに確認できるが、韓愈との唱和については、陳羽を送る韓愈詩は存在するものの、陳羽から韓愈に與えた詩は存在しないか、もしくは今に傳わらない。

長安でたまたま出會った江南出身のこの同期生は、韓愈より

かなり年上であった可能性がある。傅璇琮氏主編『唐才子傳校箋』第二冊「陳羽」の項（吳汝煜氏執筆。第四七四-四八一頁）および第五冊「陳羽」の項（陶敏氏執筆。第二四三-二四四頁）では、その生年に對する詳細な考證がなされている。いまその要點のみを以下に抄譯してみよう。まず吳汝煜説は次のとおり。

聞一多氏が『唐詩大系』で唱えた「生年七五三年（天寶十二載）」説は、陳羽の「酬幽居閑上人喜及第後見贈」詩中の「九霄心在りて 相ひ問ふを勞す、四十年閒 豈に驚くに足らんや（九霄心在勞相問、四十年閒豈足驚）」の句を根據に、彼が進士に及第した貞元八年（七九二）から四十年遡って算出されたものらしいが、この説には從いがたい。その理由は：

①陳羽が「送靈一上人」という詩を獻げた詩僧・靈一は、寶應元年（七六二）に享年三十六で卒している。しかし陳羽と靈一とは早くから交遊があり、陳羽が天寶十二載（七五三）の生まれでは、およそ計算が合わない。

②そもそも「四十年閒豈足驚」の句は、進士科及第時に四十歳であった、という意味ではなく、科擧に應じて苦節四十年、という意に解すべきであって、初回の應試を假に二十歳前後とするならば、陳羽は貞元八年（七九二）には六十歳前後となる。よってその生年を開元二十一年（七三三）前後とすべきである。（以上、丸井抄譯）

この吳汝煜説に基づけば、陳羽は大曆中（七六六-七七九）に壯年期を迎えており、大曆三年（七六八）生まれの韓愈とは世代が大きく隔たることになる。これに對して陶敏氏は、

① 陳羽の「送靈一上人」という詩題は『文苑英華』卷二二一では「送遠上人」となっている。また獨孤及の「靈一塔銘」などには陳羽の名も唱和詩も見えない。

② 陳羽の詩中から交遊の事跡が知られるのは、戴叔倫・陸澧・靈徹・朱巨川であり、彼らの活動期はほぼ代宗朝以降。また『全唐詩』中で陳羽に言及した詩を殘した詩人は、わずかに戴叔倫・韓愈・楊衡の三人しかいない。うち韓愈の「落葉送陳羽」詩は、二人がいまだ進士科に及第しない頃の作であり、しかも韓愈が長安に出た貞元二年（七八六）を遡ることはないはずである。もし吳汝煜説に基づくならば、貞元二年時點で陳羽は五十五歳、「少年の別れ」などとどうして言えようか。

③ 聞一多氏が唱えた「生年天寶十二載（七五三）」説を採るならば、貞元二年に陳羽は三十四歳、韓愈は十九歳であり、こちらのほうが理に適う。（以上、丸井抄譯）

と説く。つまり陳羽と韓愈の年齢差を十五歳程度と考えており、しかも陳羽を送る韓愈詩の繫年を、「少年別」の語感からであろう、「貞元二年」と推定している。筆者にはこれら二つの見解のいずれか一方を支持する材料がないため、斷定はできないが、陶敏氏の見解、すなわち聞一多の「天寶十二載（七五三）」説のほうが、やや自然のように思われる。ただ韓愈詩の繫年については「貞元二年から七年までの間」と、幅を持たせておくほうがよさそうである。韓愈の句「誰か云はん　少年の別れと」の意味するところは、「若き日の別れ（が再會を期しやすいなど）と、いったい誰が斷言できよう」ということであろうから、あえて「少年」の二字にこだわり、これを韓愈十九歳の作と考える必要はないと思う。ましてや陳羽はこの時すでに三十代半ばに達していたのであるから。

次に陳羽の詩風について見てみよう。陳羽は確かに戴叔倫と交遊があり、戴叔倫が南方に赴任するのを送る詩を詠んでいる。

送戴端公赴容州（戴端公の容州に赴くを送る）　陳羽

分命諸侯重　命を分かちて諸侯重く
葳蕤繡服香　葳蕤として繡服香（かんば）し
八蠻治險阻　八蠻　險阻を治め
千騎蹋繁霜　千騎　繁霜を蹋む
山斷旌旗出　山斷えて旌旗出で
天晴劍珮光　天晴れて劍珮光（かがや）く
還將小戴禮　還た小戴の禮を將って
遠出化南方　遠く出でて南方を化せん（『全唐詩』卷三四八）

＊五言律詩。下平聲「陽」韻：香・霜・光・方

【語釋】○端公　侍御史の別稱。戴叔倫は貞元四年（七八八）に容管經略使兼御史中丞を授けられ、容州（廣西チワン族自治區）に赴いた。○分命　任命される。○諸侯　ここでは節度使・監察御史・經略使などを指す。○葳蕤　華美・艶麗なさま。○繡服　漢代の侍御史の官服には刺繡が施されていた。ここでは侍御史そのものを指す。○八蠻　南方の諸蠻族。古代、南方には八つの異民族の國があるとされた。○小戴禮　前漢の戴聖が刪定した四十九篇からなる禮の書物、つまり『禮記』のこと。ここでは戴聖を戴叔倫にたとえる。○化南方　南方の蠻族を教化する。

戴叔倫は潤州金壇（江蘇省）の人で、古文復興運動の先驅者と目される蕭穎士に師事し、その門弟中隨一と稱された。撫州（江西省）の刺史などを務め、任地では民生の安定に盡力したため、譙縣開國男に封ぜられ、かつ金紫の服を加えられた。權德輿に「戴公墓誌銘」（『權載之文集』卷二四）などがあるため、

その事跡は比較的わかりやすい。貞元二年（七八六）の夏頃には一旦官を辭し、十二月には南昌（江西省）にあったが、同四年（七八八）七月、容管經略使として容州に赴任。そして同五年（七八九）六月に清遠峽（廣東省）で客死している。權德輿は「戴公墓誌銘」に「春秋五十八年」と記しているから、その生年は開元二十年（七三二）と考えられる。なお、李肇の『唐國史補』巻下に「貞元五年、初めて中和節を置く。御製詩に、朝臣奉和す。詔して本を寫し、戴叔倫に容州に賜ふ。天下、これを榮とす（貞元五年、初置中和節、御製詩、朝臣奉和、詔寫本賜戴叔倫於容州、天下榮之）」とあるとおり、最晩年の戴叔倫は德宗の御製「中和節」詩を容州において下賜されている。こうした噂は、當時長安にいた韓愈らの耳にも當然入っていたことであろう。

戴叔倫の作品では、その五律「客夜與故人偶集」詩の、

天秋月又滿　天秋にして月又た滿ち
城闕夜千重　城闕　夜　千重
還作江南會　還た作す　江南の會
翻疑夢裏逢　翻つて疑ふ　夢裏に逢へるかと（『全唐詩』巻二七三）

この前四句がことに名高く、至德元載（七五六）から大曆末年（七七九）までの詩を集めた高仲武の『中興閒氣集』にも、この詩を含む六首の作品が採られている。詩題は別に「江鄉故人偶集客舍」とするテクストもあり、『唐詩三百首』巻五などは後者を採る。「江鄉故人」というのはおそらく「江南出身の同鄉の友人」を指す。彼ら江南人は、たまたま長安城内の「客舍」すなわち旅館ないしは寄宿舍に集って、望鄉の思いを募らせていた。なお、戴叔倫は大曆年間（七六五-七七九）に壯年期を迎えており、『全唐詩』中には錢起・皇甫冉・郎士元・耿湋・崔峒・司空曙・秦系らに與えた詩も數多く見られることから、いわゆる「大曆十才子」たちとのあいだでは一定の交遊關係が存在したものと思われる。

その戴叔倫が、陳羽の山居を訪れた際にこんな詩を詠んでいる。

過故人陳羽山居（故人陳羽の山居に過ぎる）　戴叔倫

向來攜酒共追攀　向來　酒を攜へ　共に追攀し
此日看雲獨未還　此の日　雲を看て　獨り未だ還らず
不見山中人半載　見はず　山中の人　半載
依然松下屋三閒　依然たり　松下の屋　三閒
峯攢仙境丹霞上　峯は仙境丹霞の上に攢まり
水遶漁磯綠玉灣　水は漁磯綠玉の灣を遶る
卻望夏洋懷二妙　卻つて夏洋を望み　二妙を懷ふ

滿崖霜樹曉斑斑　　滿崖の霜樹は曉に斑斑たり（『全唐詩』卷二七三）

＊七言律詩。上平聲「刪」韻：攀・還・閒・灣・斑

【語釋】○向來　以前（から）。○追攀　追隨し登攀する。付き從って遊ぶこと。○丹霞　ここでは朝燒けをいう。○漁磯　釣りができる磯邊。○卻望夏洋　振り返って大水を望む。「夏」は大きいこと。『莊子』秋水篇の、河伯が秋の出水の汪洋たるを望んで、自己の卑小さを嘆いた故事に基づく。○二妙　詩才の妙絕した二人。ここでは陳羽をその一人に數える。いま一人は未詳。○霜樹　霜にあたって紅葉した樹木。○斑斑　色彩の鮮烈なさま。

陳羽の「山居」がどこにあったかは知るよしもないが、江東の某所にあったものと考えるのが自然であろう。「山中に君の姿を見かけなくなって半年が經つが、松の木の下には三間ほどの君の山小屋がいまも殘っている」と詩中に詠われたその環境は、山水の美に惠まれた景勝地でもあったのであろう。そして「二妙」の一人と稱えられた陳羽の詩才は、朝日に照らし出される紅葉の鮮やかさにも比せられる、というのである。ちなみに、陳羽の生年が天寶十二載（七五三）だとすれば、開元二十年（七三二）生まれの戴叔倫との年齢差は二十一歲ほどになる。

陳羽は決して無名の詩人ではなかった。『三體詩』上「七絕」には「吳城覽古」詩や「伏翼西洞送人」詩が取られ、また九州國立博物館所藏の重要文化財『唐詩殘篇（紙背：白氏長慶集卷第廿二）』にも彼の七絕「題舞花山大師遺居」など數首が筆寫されている。[1] 下揭は、自分を差し置いて科擧に及第し、江東へ歸省する友人を見送る詩であり、長安滯在當時の陳羽の心境をよく傳える作品である。

送友人及第歸江東（友人の及第して江東に歸るを送る）　　陳羽

五陵春色泛花枝　　五陵の春色　花枝に泛かび
心醉花前遠別離　　心の花前に醉へば　別離遠し
落羽恥爲關右客　　羽を落とし　關右の客たるを恥ぢ
成名空羨里中兒　　名を成して　空しく里中の兒を羨む
都門雨歇愁分處　　都門に雨は歇みて　分かるる處を愁ひ
山店燈殘夢到時　　山店に燈は殘れて　到るの時を夢む
家住洞庭多釣伴　　家は洞庭に住す　釣伴多し
因來相賀話相思　　因りて來り相ひ賀し　相ひ思ふを話せん（『全唐詩』卷三四八）

＊七言律詩。上平聲「支」韻：枝・離・兒・時・思

【語釋】○五陵　五人の皇帝の陵墓。ここでは借りて長安を指す。○落羽　羽を落とす。失意のさま。陳羽自身が科擧に落第したことをいう。○關右客　長安にいる旅人。陳

羽自身を指す。「關右」とは函谷關以西の地域すなわち關中をいう語。○成名　名を成す。得意のさま。ここでは友人が科擧に及第したことをいう。○里中兒　同郷の兒童。ここでは江東に歸る友人を指す。○都門　都・長安の城門。○分處　別れの場。○山店　山中の旅宿。○洞庭　ここでは太湖を指す。○釣伴　釣り仲間。

長安で進士科の試驗に應じ續けた陳羽は、幾人もの同郷人に先を越される辛い經驗をしていたことであろう。しかしこの詩の末尾が妙に明るい筆致であるのは、おそらく一定の家產に惠まれ、詩名もあったことが、陳羽の心の平衡を保っていたためでもあろうか。なお、陳羽の詩には律絕が壓倒的に多く、『全唐詩』卷三四八所收の陳羽の詩計六十三首中、五律六首・七律五首・五排三首・五絕四首・七絕四十二首を數える。また送別詩が十四首、留別詩が二首存在し、その全體に占める割合が二五・四％にものぼることから、離別詩の制作が盛んであった大曆期の遺風を、この陳羽が繼いでいたことを髣髴させる。

三、俱文珍を送る詩との比較

さて以下では、參考までに韓愈の他の送別詩を取り上げ、陳羽を送るさきの詩と比較しながら、後者の風格や特徵を改めて考えてみることにしよう。進士及第から五年後の貞元十三年（七九七）春、宣武軍節度使・董晉の幕下にあった韓愈は、汴州監軍・俱文珍が京師に赴くにあたり、董晉の主催で催された祖餞の席上、董から詩を作るよう命ぜられた。俱文珍とは、のちに王伾・王叔文ら永貞の革新官僚らと眞っ向から對立した宦官の首領で、別名を劉貞亮といい、憲宗の卽位にも貢獻した人物である。官は右衞大將軍・知內侍省事に至り、元和八年（八一三）に卒した。憲宗からは「開府儀同三司」を追贈されている。『舊唐書』卷一八四、『新唐書』卷二〇七に傳がある。

送汴州監軍俱文珍（汴州監軍・俱文珍を送る）　韓愈

奉使羌池靜　使ひを奉じて　羌池靜かに
臨戎汴水安　戎に臨みて　汴水安らかなり
沖天鵬翅闊　天を沖きて　鵬翅闊く
報國劍鋩寒　國に報いて　劍鋩寒し
曉日驅征騎　曉日　征騎を驅り
春風詠采蘭　春風　采蘭を詠ず
誰言臣子道　誰か言はん　臣子の道
忠孝兩全難　忠孝　兩つながら全きは難しと

＊五言律詩。上平聲「寒」韻：安・寒・蘭・難

【語釋】○奉使　使命を奉ずる。俱文珍がかつて南詔に使いして吐蕃を牽制したことを指す。『校注』第一冊第三三項に引く宋・樊汝霖の說。○羌池　原州平涼縣（甘肅省東

部）にあった池沼。ここでは吐蕃の住む地域を指す。○劍鋩　つるぎのきっさき。○采蘭　西晉の束晳「補亡詩六首」其一「南陔」の「彼の南陔を循りて、言に其の蘭を采る。庭闈〔父母の居所〕を眷戀すれば、心　安んずるに遑あらず（循彼南陔、言采其蘭、眷戀庭闈、心不遑安）」に基づく語。親を養うことを意味する。俱は宦官であるため、その養父を見舞うのだろうとする説がある。○臣子道　忠臣として、また孝子としての道。次句の「忠孝」と呼應する。

この詩には「今の天下の鎮は、陳留〔汴州〕を大と爲す（今之天下之鎮、陳留爲大）」で始まる送序がついており、その後半では「我が監軍俱公、侍從の榮を輟め、腹心の寄を受け、その武毅を奮ひ、我が皇威を張り、變に遇ひて奇を出だし、事に先んじて獨り運らす。〔州民らは〕偃息談笑し、危疑以て平らかなり（我監軍俱公、輟侍從之榮、受腹心之寄、奮其武毅、張我皇威、遇變出奇、先事獨運、偃息談笑、危疑以平）」と、その汴州での治績を稱えている。また送る詩の頸聯では、このたびの歸京が養父を見舞うためでもあることが明かされ、續く尾聯では、俱が宦官輩を統率して朝廷への忠誠を誓うとともに、孝子としての德をも併せ持つことを稱える內容になっている。こうした體裁・樣式はおそらく、大曆期以來多產されてきた公的送別詩の傳統を受け繼ぐものであり、韓愈はここではそうした傳統に基づいて作詩・作序したものと考えられる。(2)

これに對してさきの「落葉一首　陳羽を送る」詩は、首句の二字をとって詩題とする『詩經』以來の傳統を祖述し、古風な味わいを前面に推し出そうとしている。すなわち、

落葉不更息　落葉　更に息まず
斷蓬無復歸　斷蓬　復た歸る無し

「落ち葉は降り止む風情さえなく、根の斷たれた蓬もあてどなく轉がるばかり」という比興的な詠い出しに始まり、暗に寄る邊ない二人の境遇に喩えている。そして、

飄颻終自異　飄颻　終に自ら異なり
邂逅暫相依　邂逅　暫く相ひ依る

「漂泊やまぬ我々はついに袂を分かつことになったが、これまでの付き合いもまた偶然によるもの」と、長安での邂逅のかけがえのなさを裏面から說く。さらに、

悄悄深夜語　悄悄として深夜に語れば
悠悠寒月輝　悠悠として寒月輝く

「しんみりと深夜に語る我々の頭上には、天高く輝きわたる寒月がある」と、別れの場面を印象的に描き出し、最後は、

誰云少年別　誰か云はん　少年の別れと
流涙各霑衣　涙を流して　各〻衣を霑す

「いつ再會できるとも知られぬと思えば、流す涙で二人の袖もしとどに濡れる」と結ぶが、眞情をすなおに吐露した表現であり、全體として私的送別詩の範疇に加えるべき作品となっている。涙を描くことが少なかったとされる韓愈の詩にしては、珍しい部類に入るかもしれない。[3] ちなみにこの詩は、清初の文人・朱彝尊が「此れ亦た拗律と謂ふ可し（此亦可謂拗律）」（『集釋』上冊第七頁）と指摘するとおり、拗體の五言律詩。[4] 拗體とは、近體詩本來の均等に交替する抑揚（平仄）を、一定の法則に隨って歪ませることで、感情の激しい起伏を詩中に寫し取ろうとする一種の修辭技法である。韓愈の律詩や排律には拗體がまま見受けられるが、王維や杜甫の頃から盛んになった拗律の制作が、賈島や許渾へと至るあいだに、韓愈をも經由していたことが、この詩において確認できる。陳羽との交情の厚さが、韓愈をして拗體の五律を作らせた可能性もある。ちなみにさきの倶文珍を送る詩は、平仄律にきわめて忠實な正格の五律であった。近體詩はそもそも應制・應教の詩體として發達してきたものであり、祖餞など公的な場における應酬には極めて親和性に富む體裁であるといえよう。

韓愈は、戴叔倫の五律「江鄉故人偶集客舍」詩中に描かれていたような、長安城内のとある客舍から、旅立つ陳羽を見送ったものであろうか。長安の皇城に近い興道・務本・長興などの諸坊には、商人が開いた旅館があって、長安を往來する旅客の宿舍になっていたというが、[5] 中には江南人らが好んで常宿とする特定の客舍もあったに違いない。進士科を受驗する江南出身者たちは、ときにどこかの客舍に會して交遊を深め、勉學に詩作に、切磋琢磨し合っていたのであろう。韓愈も「昌黎の人」と自稱こそすれ、長安に出る前までは宣城の寓居に五年も住んでいた。土地の言語にもかなり通じていたはずである。ちなみに同期の進士・歐陽詹（泉州晉江の人）にも「除夜長安客舍」と題する五律があり、「十たび上りし書も仍ほ寢み、流るるが如く歳も又た遷る。家を望みて壽を獻ぜんと思ひ、甲を算へて年の長しきを恨む（十上書仍寢、如流歳又遷。望家思獻壽、算甲恨長年）」と、長安の客舍に送る年の瀬の寂しさを詠じている。長安での應舉に歸省もままならない當時の嚴しい狀況が、こうした詩からもよく窺われよう。

＊宣城における少年期の交遊が、韓愈のその後の人生に大きな影響を及ぼしたと考える學者がいる。景遐東氏の論文

「韓愈避亂江南經歴考辨――兼論其江南文友圈」（『湖北師範大學學報』（哲學社會科學版）第二四卷第四期所收、二〇〇四）は、宣城の寓居が韓愈の亡兄・韓會の創建になるものと推定し、宣城を根據地として韓會と柳鎮（柳宗元の父）の親交が深まり、また韓愈自身もこの江南人脈をたぐることで、やがて孟郊・張籍・皇甫湜・陸暢・馮宿・歸登ら江南人との交遊に擴がっていったと分析する。

おわりに

以上、陳羽を送る韓愈の詩を中心に讀んできた。陳羽はおそらく大曆期の遺風を傳える詩人の一人であり、かつ蕭穎士に師事した戴叔倫との交遊から、古文復興運動の機運にも間接的に接していた可能性がある。青年韓愈の詩からは、そんな陳羽に對する深い交情と敬意とを讀み取ることができそうに思う。今回は、陳羽の事跡に關する史料が決定的に乏しいため、韓愈との交遊の模樣を素描する程度に止まった。次回は同じ貞元八年の進士である李觀とのあいだで應酬された交遊詩を中心に見てゆくが、今回よりも史料が多く、先行研究も複數存在するので、當時の交遊・作詩の情況が次第に鮮明になってゆくものと考えている。

【注】

（1）　參照：九州國立博物館所藏品デジタルアーカイブ：http://d-archive.kyuhaku.jp/da/collection/info/id/7/

（2）　唐代の送別詩には公的と私的の別がある。詳しくは松原朗氏著『中國離別詩の成立』（東京：研文出版、二〇〇三）「盛唐期の臺閣詩人と送別詩の確立」第一八八頁參照。

（3）　清水茂氏注『韓愈』（東京：岩波書店、一九八一）の末尾にある吉川幸次郎氏の「跋」には「『涙』という字、或いは涙と關連した意味の字が、彼（韓愈。引用者注す）の詩にはきわめて稀」と述べられている。

（4）　首聯「落葉不更息、斷蓬無復歸」は仄起式拗聯（＝雙拗）ハ型、頸聯「悄悄深夜語、悠悠寒月輝」は同ロ型に相當する。詳しくは拙著『唐詩韻律論―拗體律詩の系譜』第九五頁を參照されたい。

（5）　『名城史話』全二冊（北京：中華書局、一九八四）上冊「唐代長安」（姚堅氏執筆）には「當時長安城中、有些商人開設了店舖、茶肆、酒館。在興道、務本、長興、靖安、親仁、永樂、宣平、布政、崇賢、延壽等坊內、都開設着旅舍、供來來往往的旅客寄居」（第六五頁）と記されている。